

Title	ヤジロウ考
Sub Title	
Author	海老澤, 有道(Ebisawa, Arimichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.3 (1940. 12) ,p.29(409)- 60(440)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19401200-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヤジロウ考

海老澤 有道

宗教、思想界は云ふ迄もなく、社會、文化各分野に互つて過渡期の日本に注目すべき足跡を遺した耶蘇會の創立者の一人、東洋の使徒サヴィエル聖人をして日本に聖なる福音エヴァンゼリヨを傳へようとの慾望を起さしめる直接の動機を與へたヤジロウなる人物については、從來二三の文獻論考も、古く明治中葉 Dienst や Haas 等により公けにされたが、依然、國史上の謎の一人物である。耶蘇會創立四百年を記念するに當り、その日本人の初穂なる彼について一考し、聊かなりともその姿を描出するものもあながち無意義ではあるまい。

が、汗牛充棟のサヴィエル傳を涉獵校合し盡す事は不可能である如く、ヤジロウにても同様である上、紙數も限られてゐる故に、冗長を厭ひ、諸文獻に共通の、且問題を含まぬ事柄、逸事等は敢て省略した。御諒承されたい。

註(一) Dienst, G. E.: Paul Anjuro; or the Introduction of Christianity (Roman Catholic) in Japan, in "Japan Mail"

Apr.—May 1894. Haas, H.: Der Samurai Anjiro. Quellen zur Geschichte des ersten japanischen Christen, in "Die Wahrheit" Bd. II. 1901.

一、姓 名

ヤジロウは一五四八^{天文十七}年十一月二十九日ゴア發耶蘇會總長ロヨラ宛書簡に、自らの入信始末を報じてゐるが、前半生には言及して居ず、爲に彼の姓名すら今尙模糊たる霧に包まれてゐる。一五四八年夏ゴアに於て彼と起居を共にし、聽て我國に渡來、學識、才筆をうたはれたフロイス P. L. Frois, s. J. の日本史を見るに、彼の名は Anjiro⁽¹⁾ となつてゐる。又、彼と同船したと云ふピント M. Pinto も Angiroo⁽²⁾ と記し、其他トルセリニが Anger⁽³⁾、グスマンは Angero⁽⁴⁾、クラッセが Anger⁽⁵⁾、シャルルヴォアは Angero⁽⁶⁾、佛蘭西史家により Anger と稱されるところを用ひてゐる等、殆んど凡ての古編纂史に互つてゐる。又近くはハマスはサヴィエル書簡には Angero とあるが日本語で本當は Anjiro となし、プロフインレーは Angero⁽⁷⁾、シニールンマーも亦 Anjiro を固持する。一方シニ師はフロイスに「Hanshiro 葡萄牙綴りでは Anjiro 又 An ero と書く」と註し、卷末の後記に於ても同様の注意をなしてゐる⁽¹⁰⁾。然し我々はそれを Hanshiro の轉訛とすべき根據を——葡語で H を特に發音せぬとは云へ、それを態々抜いたとの根據も——見出すに苦しまざるを得ない。寧ろコーリツヂの Han-Sir⁽¹¹⁾ をハマスが Hachiro か

と推定した方が⁽⁸⁾、往昔挿入された鼻音を抜いた點により一理があらう。

然しクロアの所謂マカオの編年史家、ジョアン・ロドリゲス P. João Rodriguez, S. J. の著と考へられてゐるアジュタ圖書館「稿本日本教會史」に

攝理は一日本人をマラッカに導いた。諸書は通常彼を Angero と呼ぶが、彼の本當の名は Yajiro であつた。彼は日本に居る時、現世を棄てた徴に Anxey と稱し髪を剃つた⁽¹²⁾。

とあり、ワリニアノ P. A. Valignano, S. J. も同様に記し⁽¹³⁾、バルトリにも「Angero 或ひは Iajiro と訂正せられる⁽¹⁴⁾」とある事は、最早論議の餘地を残さぬ様で、クロアが之に従つてより、ブルー⁽¹⁵⁾、シュタイシェン⁽¹⁶⁾、ベルソール⁽¹⁷⁾等近時の佛人史家に踏襲され、我國に於ても之が定説となつた様である。その轉訛の理由は説明せられてゐないが、Anxey と Yajiro とが、天使を聯想させて結合され Angiro と稱されるに至つたものであらう。

彼に就て日本側史料は一言だに觸れたものが無い。稗史野乘類が日本人最初の信徒として記すロレンソ了西は疑ひもなく山口でサヴィエルより受洗し、傳道第一線に活躍した元琵琶法師である。が我國史家に依りヤジロウと同一人物と考へられた場合も少くはない⁽¹⁸⁾。

一方淺井氏編「書翰記」は何等の考證なく勘四郎に宛字し⁽¹⁹⁾、又渡邊修二郎氏が「内政外教衝突史⁽²⁰⁾」に引いた「臥猪床」なる書により邦人最初の教師として里見勘四郎なる人物を擧げたからであらう。語呂

が似てゐるので肝心のカトリック側に無批判に踏襲され、古くは加古氏を初め、近くは大井氏により里見彌次郎と折衷されてゐる有様である。⁽²¹⁾

が、信憑し得る史料に於て我々は彼の姓を見出し得ぬばかりか、名に宛つべき漢字の根據も見出し得ないのである。現在普通彌次郎と宛字されてゐるが、⁽²²⁾彼に限らずローマ字のみで傳へられた邦人名を典據なくして宛字する事は慎しむべきであらうと考へてゐる。

- 註(1) Frois, L. s. j. — Schurhammer, G. s. j.: *Geschichte Japans (1549—1578)* Leipzig 1926. s. 1.
- (2) Pinto, F. M.: *Peregrinação, em que dá conta de muitas e muito estranhas cousas que viu e ouviu no reino da China...* Lisboa 1614. f. 262v.
- (3) Tursellini, H. s. j.: *Vita S. Francisci Xaverii. Monachii 1627.* p. 258 但し改訂初版は一五九六年刊
- (4) Guzman, L. s. j.: *Historia de las Misiones que han hecho los Religiosos della Compañia de Iesvs,...* Alcala, 1601. I. p. 54.
- (5) Crasset, J. s. j.: *Histoire de l'Eglise du Japon.* Paris 1689. I. p. 56.
- (6) Charlevoix, s. j.: *Histoire du Christianisme au Japon.* Paris 1828. I. p. 39.
- (7) Gonçalves, S. s. j.: *Da historia dos Religiosos de Companhia de Jesus.....*, (Bib. de Ajuda) 岡本良知氏著「*メトガルを訪ねる」昭和五年日葡協會「入二頁の目録に依ればメホマンシローと記してゐる。
- (8) Haas, H.: *Geschichte des Christentums in Japan* Tokyo. 1902 I. s. 57.
- (9) Profillet, : *Le Martyrologe de l'Eglise du Japon 1549—1649.* Paris 1897. III. p. 270.
- (10) Schurhammer: *Die Deschichte Japans von P. L. Frois.* s. I. n. 4, s. 517. 其題「——Das Kirchliche Sprachproblem

- in der japanischen Jesuiten-mission des 16. und 17. Jahrhunderts. Tokyo 1928. — Die Disputationen des P. Cosme de Torres s. r. mit den Buddhisten in Yamaguchi im 1551. Tokyo 1929. — St. Francis Xavier. St. Louis 1928.
- (11) Coleridge, H. s. r.: Life and Letters of St. Francis Xavier. London 1872. I. p. 421.
- (12) Cros, J. M. s. r.: Saint François de Xavier. Sa vie et ses lettres. Toulouse 1900. II. p. 49. — Historia de Egreja do Japaó (Bib de Ajuda) f. 195.
- (13) Cros: II. p. 47 n. 1.
- (14) Bartoli, D. s. r.: Dell' Historia Compagnia di Gesu. II Asia. Roma 1653. p. 114.
- (15) Brou, A. s. r.: Saint François Xavier. Paris 1922. I. p. 429.
- (16) Steichen, M. w. a.: Les Daimyo Chrétiens ou un Siecle de l' Histoire Religieuse et Politique du Japon 1549-1650. Hongkong 1904. p. 3.
- (17) Bellessort, A.: Voyages de St. François Xavier. Bonn 1935. p. 48.
- (18) 平井希昌氏「伊達政宗歐南遣使考」〔明治九年〕(伊勢齋助編「伊達政宗歐南遣使考全集」〔昭和三年東京裳華房〕所收三一四頁)を先驅とし、渡邊修二郎氏「世界ニ於ケル日本人」〔明治二六年東京東陽堂〕等に踏襲された
- (19) 淺井虎八郎氏編「聖フランセスコザベリヨ書翰記」〔明治二四年東京十字屋〕中卷一七六頁以下
- (20) 渡邊氏「内政外教衝突史」〔明治二九年東京民友社〕五頁
- (21) 加古義一氏「山口公教史」〔明治三〇年京都〕、長富雅二氏「ザベリヨと山口」〔大正十二年山口〕、三木露風氏「日本カトリック教史」〔昭和四年東京第一書房〕、大井蒼悟氏「細川忠興夫人」〔昭和一〇年東京カトリック書院〕等
- (22) 例へば新村出博士「南蠻廣記」〔大正十四年東京岩波書店〕、姉崎正治博士「切支丹傳道の興廢」〔昭和五年東京同文館〕等無批判的に彌次郎を用ひて居られる

二、郷里と身分

ヤジロウの郷里は疑ひもなく鹿兒島である。サヴィエルが同地に上陸後、初めて印度歐洲に報じた數書簡一五四九・一五五〇に

我々のパウロ・デ・サンタ・フェ(ヤジロウ)の郷里である Cangoxima に着いた。我々は彼の兩親其他から非常な榮譽を以て迎へられた。⁽¹⁾

と記してゐるのみならず、ヤジロウ自ら母校宛同日附書簡に鹿兒島に親及妻子の居る事、従つて郷里である事を物語つてゐる。⁽²⁾「稿本日本教會史」は明瞭に

彼は九州 *Kiuku* の九ヶ國の一、薩摩の國の首都鹿兒島 *Cangoxima* に生れた。彼は同地にて成人し結婚した。⁽³⁾

とあり、ピント、バルトリ、グスマン等も同様故郷を鹿兒島と明示してゐる。⁽⁴⁾

而してフロイスは一五四八年ゴアで彼に會つた時、「ほゞ三十六、七歳⁽⁵⁾」とし、其他の書は一五四三、四年頃に三十五歳としてゐるが、⁽⁶⁾フロイスこそ最も信頼するに足らう。即ち彼は大凡一五一二、三年頃即ち我が永正九、十年頃の生れと思はれ、サヴィエルより僅か數歳若年であつた譯である。

然るに若干の人々は彼を大和の人となす。が、之亦我國稗史類に捉はれ、殊に「邪教大意」「對治邪執

論」の著者南禪寺雪窓宗崔が肥前生れのロレンソを最初の伴天連の伴侶として記し、又、「大友家秘録」に「和州の醫者種子嶋にあるを誑し蠻國へ連行、ばてれんに仕立」等と名を擧げずして出てゐる事と混同されたからに他ならない。更に富士川博士の如き、ヤジロウを醫師として、後に山口に於て診療してゐる如く記して居られるが、それは亦山口にて受洗したパウロ・キヨゼンとの混同で、ヤジロウ、ロレンソ、キヨゼン三者が古來混同されてしまつてゐるのである。

かゝる明治中葉の頃は兎も角、驚くべき事に最近に於てヤジロウの前身について非常なる努力を傾注し、「出身地が鹿兒島か或は大和奈良方面であれば尙更結構で」日本史料に醫者とあるのも「手に一種の職を持つてゐる特殊な技能者であること」を示すとて、彼を鶴岡八幡宮「快元僧都記」に見ゆる奈良大工與次郎嫡子與三郎なりと斷じ、サヴィエルが日本文字を「字行恰も柱を並べたる如きは何故か」と尋ねたと云ふクラッセを引いて——原書簡には柱等とは無くクラッセの文飾である——「立體的觀察が濃厚に認められる事は彌次郎の前身の職業を觀察する際に特に注意を要する」と云ひ、最後に彼が八幡船に投じたのも偶然に非ずと云ふ立論がなされた。私はたゞその餘りの大膽な立論と索強附會とに啞然たらざるを得ないのである。

外國史料に於てもヤジロウの身分職業を明記したものは無い様である。フロイスはたゞ「上流」又は「貴い」とのみ記し、グスマンは「高貴な人」、バルトリは「血統の尊い」、クラッセは「家柄賤しから

ず資産に富む⁽¹³⁾」シャルルヴォアは「富裕な薩摩の國で良い家柄の一⁽¹⁴⁾」と何れも貴族階級の如き記述をなしてゐる。その上、帶刀してゐた事、或は出奔の際騎馬であつた事等から武士階級とも考へられ、ハアスは明確にサムライと呼んでゐる⁽¹⁵⁾。然し當時にあつて騎馬帶刀のみを以て武士と斷ずる絶對的根據とはなり得ないであらう。ブルーは「貴族(サムライ)とは思はれぬ」として中流階級としてゐるが⁽¹⁶⁾、寧ろ諸文獻の全體を通じて見て出奔前より葡萄牙商人と親交があつた事、渡印に際しても從者を伴つた事、歸國後、領主に謁してゐるから島津家にも出入し得た地位の人である事により、彼は鹿兒島の最も早い頃の貿易關係の富商であつたと思はしめられる⁽¹⁷⁾。

註(1) *Avisi Particolari delle Indie di Portogallo*. Roma 1552. pp. 287—288, 294. Thibaut, E. s. r.: *Lettres de S. François Xavier*. Bruges et Paris 1922. III. pp. 13. 72. 79.

(2) 村上直次郎博士譯註「耶蘇會士日本通信(豊後篇)」上卷〔昭和十一年東京帝國教育會〕二八頁 Haas: I. s. 301.

(3) *Historia*. in Cros: II. p. 49.

(4) Pinto: f. 272. Bartoli: *Asia*. p. 114. Guzman: I. p. 415.

(5) Frois: s. 3.

(6) 例へば Crasset: I. p. 56 Charlevoix: I. p. 39. Schurhammer: Xavier. p. 173. — Sprachproblem. s. 13. 41
五四七年の項に凡そ三十五歳或は四八年に三十六歳と「凡そ」の字を附してゐない

(7) 富士川游博士「日本醫學史」〔明治三九年東京〕—— *Kurze Geschichte der Medizin in Japan*. Tokyo 1911. s. 35. 吳秀三博士も「シーボルト日本交通貿易史」の註に此の誤謬を踏襲された。

- (8) Coleridge: II. p. 78
- (9) 竹内辰平氏「彌次郎アングルの前身について」古典研究四ノ四〔昭和十四年四月〕
- (10) Frois: s. 1.
- (11) Guzman: I. p. 54.
- (12) Bartoli: Asia. p. 114.
- (13) Crasset: I. p. 56.
- (14) Charlevoix: I. p. 39. Profillet: III. p. 270.
- (15) Haas: I. s. 57, 60. — Der Samurai Anjiro.
- (16) Brou: I. pp. 429—430.
- (17) Bellessort: p. 49. には「アルワールレスとの關係は我々をして彼は商人階級であるか或ひは日本沿岸貿易に従事する船主である事を思はしめる」とある

三、サヴェリエルとの邂逅

ヤジロウが日本を出奔、渡印するに至つた顛末は、彼自らのロヨラ宛書簡に詳しいが、「日本に於て異教徒であつた時、或る事の爲、人を害し、免れんと、我國の出家の僧院エケレツヤ（當地の教會堂の如きもの）に遁れ」、懊惱する中、面識あつたアルフロ・ワス Alvaro Vaz と云ふ葡商人が渡印する事をすゝめ、ドン・エルナンデ Don Hernando の船に紹介狀を書いて呉れたので夜半、船を訪ねた所、誤つてジョル

ジ・アルワールレス Jorge Alvarez の船に至つたが、その好意に依りサヴィエルに會はうと志すに至つた
一五四八・一一・二九⁽¹⁾ と記してゐるに對し、クラッセ、シャルルヴォア、プロフィールは兼て素行治まらず
ゴア發ロヨラ宛書簡 一朝發心して佛門に歸依したが、僧の答へにも満足出來ずに居る時、偶々渡印をすゝめられたが、妻子
と別れるのを躊躇する中、殺人を犯し、遂に居たゝまれず出奔するに至つたと、ヤジロウの自記とは前
後錯亂してゐる。

ピントは一五四六年十二月の「或る朝、山川港 *Hiamangoo* を將に出帆しようとしてゐる時、……丘
上から二人の騎者が大忙ぎで驅下り來り」乗船を求めたので、不取敢小船を出した云々と⁽³⁾。例によつて
詳細を極め、追手と押問答を交はした當りは全くピント式脚色の跡も窺はれるが、追手に迫られた急迫
した點——從つて殺人後間もなく乗船した點はクラッセ等と一致する。然し云ふ迄もなく最初のサヴィ
エル傳の著者トルセリニがヤジロウの自記に從つた如く、自記こそ正しとせらるべきである。⁽⁴⁾

ヤジロウの投じたアルワールレスの船の山川出帆をシャルルヴォアは一五四六年とし、⁽⁵⁾ピントは一五四
七年一月十六日と明記する。⁽⁶⁾が之は彼の書に史實性を賦與せんが爲の故意に出たもので、その前後の記事
よりしても疑はしい。岡本良知氏はその名著に於てヤジロウの一五四七年末、マラッカ二度目の滞留を
季節風の關係から逆算して、一五四六年の秋又は初冬であらうと推定して居られる。⁽⁷⁾

船中ヤジロウはキリシタン教義をきゝ、受洗を決心したが、マラッカに着くとサヴィエルは香料諸島傳

道に赴いて居り、同地の神父は授洗を拒み、聽て日本に向ふ季節風となつたので支那を経て歸國せんとしたが、故國を眼前に暴風の爲吹戻され、再びマラッカに至りアルワーレスの案内に依り、同地の會堂で結婚式を司祭中のサヴィエルを訪ね、彼はヤジロウを抱擁して喜んだと云ふ。之等の事は彼の自記に見え、且諸書の記す所でもあり、その邂逅はサヴィエルの耶蘇會本部宛書簡一五四八・一・二〇サに詳しい。（9）

ヤジロウはサヴィエルの人格に接し「初めて彼を見し時より、彼に仕へ決して離るゝことなきを望む」程、傾倒し、サヴィエルも亦、始めて日本人に接しその才智と熱心を愛し、折柄印度傳道に失望してゐた事として、交際する事、僅か數日にして、一五四八年一月初、ヤジロウをして日本傳道の東道者として役立つ様、組織的に教義を學ばしめんが爲、ゴアの聖パウロ學院に入學すべく出發を命じた。（10）クラッセは、日本人が初めて基督教に入るのであるから、印度首都大司教により受洗せしめ様としたのだと云ふが、之はゴア行の主な動機ではないだらう。

註(1) Camara, M.: *Missões dos Jesuitas no Oriente nos Seculos XVI e XVII*. Lisboa 1894. pp. 77—78. 「耶蘇會士日本通

信(京畿篇)上卷「昭和二年東京駿南社」序説六頁

(2) Crasset: I. p. 56. Charlevoix: I. pp. 39—40. Profillet: III. p. 271.

(3) Pinto: f. 262.

(4) Tursellini: pp. 258—259.

(5) Charlevoix: I. p. 40. Profillet: III. p. 271. 但 Haas: I. s. 58. n. 10. の指摘する如く二年間、海上をさまよつた様

ヤジロウ考(海老澤)

に記してゐるのはシャルルヴォアの誤り

- (6) Pinto: f. 263.
- (7) 岡本良知氏「十六世紀日歐交通史の研究」昭和十一年東京弘文莊「三〇二—三頁。其他幸田成友博士「和蘭夜話」昭和六年東京同文館「二九四頁。Brou: I. p. 429. は一五四六、七年。Schurhammer: Sprachproblem. s. 13. は一五四六年。尙山本秀煌氏「聖フランシスコ・ザベリヨ」大正十四年東京イデア書院「八〇頁。比屋根安定氏「聖サギエル傳」昭和九年東京日獨書院「一六七頁等に「一五四七年四月」とあるのは、一五四八・一・二〇附サヴェィエル書簡に、同月モルツガにて一葡萄牙人より日本の事を聞いたとあるのを Tursellini 以來誤まつたものである。況や渡邊氏「世界ニ於ケル日本人」六九頁の如く一五四三年ではない
- (8) Camara: pp. 78—79. 「通信京畿篇上」序説七一—八頁
- (9) Thibaut: II. pp. 14—18. Coleridge: I. pp. 417—419.
- (10) Camara: pp. 79—80. 「京畿篇上」序説八一—九頁
- (11) Crasset: I. p. 59.

四、聖パウロ學院

一五四八年三月、ゴアに至つてより

暫くしてヤジロウはポルトガル語を良く學び、インヂャ人、ポルトガル人及我々の風習や生活方法等を良く知るであらう。その間に我々は彼に教義を教へ、ヤジロウは日本字に上手であるから、予

が爲に我等の御主ゼス・キリシトの出現迄の物語、信仰箇條註解を附したドチリナ・キリシタン全部を日本語に翻譯して呉れるであらう⁽¹⁾一五四八・一・二〇、サヴィエル・コチン發ゼズ會宛
と云ふサヴィエルの期待にそむかなかつた。ヤジロウ自らは「少しポルトガル語を解した⁽²⁾」と謙遜してゐるが、サヴィエルは前年十二月初めて彼と會つた時、

彼は可成りポルトガル語を知つてゐたので彼は予の語る事を理解し、亦彼の語る事も予は理解出来た⁽³⁾一五四八・一・二〇

と記して居る。實際渡印前葡商人と交誼を結んで居り、マラッカで既に信經^{クレド}の講解を筆録してゐる程だから相當語學は進んでゐたであらう。フロイスも同年八月ゴアでヤジロウに會つた時「彼は既にポルトガル語を話したので、凡てを理解し得た⁽⁴⁾」と記してゐる。

入學後は、學生と起居を共にしてゐたミセル・パウル Misser Paul 學院に接續してゐた病院に奉仕してゐたコスム・アネス Cosme Anes やランチロツティ Nicolao Lanclotti は勿論 Francisco Perez, Rochus de Oliveira, Alfois de Castro, Gaspar Rodriguez⁽⁵⁾ 等にヤジロウは多少共指導を受けた事であらう。がサヴィエルは特に彼をイタリヤ人バードレ・ニコラオ・ランチロツティに委託し葡語とカテキスモを學ばせ、受洗準備をさせた。彼は神經質な謹直な人で、當時同地の修士等がカテキスモの課業を輕んずるのを斷然批難した程の人であるから、ヤジロウの授業は餘程嚴格に行はれた事であらう。ヤジロウ

は六ヶ月間に良く葡語を教へられた事を報じ、且師とパードレ・トルレス Cosme de Torres s. j. 等の指導により信仰の光を興へられた事を感謝してゐる。サヴィエルは一年後の書簡に日本傳道の決心を述べた後、

彼等(日本)は非常に善い徳と勝れた鋭智とを有する青年である。貴下に長い書簡を送つたパウロ

(ヤジ)は特にさうである。八ヶ月の間に彼は葡語を完全に読み書き話す迄に進んだ(8)

ロヨ
ラ宛

とヤジロウの語學を稱讚してゐる。實際右にもある如く彼がゴアに來てより八ヶ月の一五四八年十一月十九日附でロヨラ宛葡文書簡を送つてゐる事實が證明してゐる(9)。

語學と共に彼の信仰も亦著しく進んだ。彼の書簡は「萬物の造主なるデウスと我等の贖ひの爲十字架クルスに掛り給へるゼス・キリシト」等と、全く彼の固き信仰を以て記され、且信仰の知識の増進をデウスの聖寵ガラサとして讚美してゐる(10)。師ランテロツティは

彼は自ら我等と共に我等の信仰の祕義に到達した後キリシタンとなつた。……彼は熱心に祈り且我等の御主ゼス・キリシトへの憧憬と召命とにつき黙想して居り、その精神は極めて立派で筆舌に盡し難きものがある。カテキスモの授業の時は我々に質問し、又彼は我々にその郷國の宗教についての報告を興へた(11)。

と報じてゐる。此の年の聖靈降臨日即五月十日、ヤジロウは二人の伴僕と共にゴア大司教アルブケルケ Juan de Albuquerque O. F. M. より聖水を授かり「サンタ・フェ聖信のパウロ」Paulo de Santa-Féなる靈名を與へられた。之はコスム・アネスが名付親となり聖パウロ學院の名を記念し、同學院の有つ二名稱を折衷したものであるが、使徒聖パウロの如く異教國への使徒たらしめんとの意味を含んだものであらう。

受洗後、彼は學院に他のイルマン等と起臥する事となつた。同居學生は葡、西、印度諸州は勿論エチオピアに及び、十二、三ヶ國語が語られたと云ふ。その中であつて彼は拔群の成績を示して居り、折柄學院に來たサヴィエルは益々日本人に心を引つけられ、専ら彼とのみ交り日本傳道の決意と企劃を固めたのであつた。應て秋になつてサヴィエルの命によりトルレスは聖マテオ福音を學院で學生に講じた。

予は二回聖マテウスを彼に説きたるに第二回目に第一章より末章に至る迄悉く記憶せり。彼がキリシタンとなりたる後約六ヶ月(註一五四九・一・二五、トルレス・ゴア發ポルトガル同勞宛)

と云ふ調子で、翌四九年一月には同じトルレスにより早くもロヨラの「心霊修業」を修し同上、書簡、天晴、最初の日本人ゼズス會修士たらんと修鍊に怠りなかつた。

「彼は今心霊修業をしてゐて甚だ良い成績を擧げてゐる(註一五四九・一・一二)と報じたサヴィエルは、同年六月の數書簡にも同様(註一五四九・一・一二)に記し、葡萄牙王ジョアン三世への上書にも

彼等は教會の祈禱オラシヨを誦し、定時に聖なる默想を行ふ。彼等を最も動かし感激させたものはゼズ・キ

リシトの御作業と御苦難パッションを考へ、その十字架クルスと死とを想起する事である。彼等は屢々之等について非常に深く強い情感と優しい愛情とを以て默想する。彼等はパードレ・イニャシヨの禁欲的默想を嘆賞すべき熱心を以て修業し、その知識は非常に進み、デウスの瞭らかなる知識にも顯著な成果をあげてゐる。彼等は自ら進んで屢々告解と彌撒サクラメントの聖奠を受け、熱心にその故國の人々をゼス・キリシトの教に導き度いと我々と共に日本行航海に加はらん事を望んでゐる¹⁶。一五四九・六・二〇、マラッカ發信

とヤジロウの學院生活と熱心な修練模様を傳へ、フロイスも四八、九年の事を一括して「彼はイルマンと同様の衣を着け」又特に

我々と共にレクトルにて食し、他のイルマンの如く土曜毎に告解し、日曜毎に聖體を拜領してゐた。又コンパニヤの心霊修業を二十日間以上も續け、其後ジョアンと呼ぶ彼の伴侶なる兄弟にもなさしめた。……彼は非常に進歩し、彼に優る者は學院中コレジヨに殆んど無くなり、一同に良き信仰の模範を與へた¹⁷。

と報じてゐる。

而してヤジロウ自らサヴィエルに對し「百の生命を捧げるに必要な力を與へられん」事を祈り、且「日本がゼス・キリシトの爲、信仰に進まん事を望む」と述べ¹⁸。一五四八・一一・二九、サヴィエルの書簡¹⁹。一五四九・四・九、マラッカ發信
によつて、²⁰「おと不幸なる同胞よ。デウスが彼等の僕として創り玉ひしものを崇むる」

とは」と嘆ずるのが常であつたと云ふ。此のヤジロウの才能と信仰と、故國に福音エヴァンゼリヨを傳へんとする熱情は實にサヴィエル聖人をして日本に來らしめた最大動機の一であつたのであり、ヤジロウの最大の功績と稱すべきであらう。サヴィエルは

予は心中深く勵まされて、たとへ予の全生涯に嘗て無き大なる危険に曝される事は判り切つた事とは云へ、日本行の計畫を捨てる事は出來ない……それは日本人パウロが予に語つた所より我が心に起り、或はデウス御自ら、我が心に備へ結ひし所より生じたものである(20)一五四九・一・一二

と語つてゐる。而してヤジロウが「日本にコンパニヤの學院コレジヨの建てらるゝを見んと欲し(18)」た事はシリングの云ふ如く「彼が聖パウロ學院や其他印度の神學校セミナリヨや學院コレジヨが日本に亦大なる意義を有する事を認識した(21)」からとしても、勿論宗教的意味に止まつたものであらうが、日本教育史上、一先覺者として特筆さるべきであらう。

かくして一五四九年六月二十四日サヴィエル一行はマラッカより海賊船に投じ日本に向つた。それは他に日本行船舶が無かつたからに相違ない(22)一五四九・六・二〇、サヴィエル・マラッカ發。ヤジロウ等が葡萄牙人の不品行を見て葡船では日本人が基督教に入る躰23きとならうと心配して支那船を主張したのだと云ふ説もあるが、餘り(23)にうがちすぎた見解と云ふよりも誤解に本づくものである。

註(一) Thibaut: II. p. 18. Coleridge: I. p. 419.

ヤジロウ考(海老澤)

(四三)

四五

- (2) Camara : p. 79. 「京畿篇上」序説八頁
- (3) Thibaut : II. p. 15. Coleridge : I. p. 417.
- (4) Frois : s. 3.
- (5) Schurhammer : Xavier. p. 184.
- (6) Schurhammer : Sprachproblem. s. 16.
- (7) Ibid. s. 15.
- (8) Coleridge : II. p. 71. Thibaut : II. p. 55.
- (9) Cartas do Japao. Evora 1598. 近くは Camara : pp. 77—80. に葡文で收められてゐるものは原文を偲ぶに足らう。村上博士により既に「京畿篇上」序説中に邦譯されてゐる
- (10) Camara : p. 80. 「京畿篇上」序説九—一〇頁
- (11) Schurhammer : Sprachproblem. s. 16.
- (12) Tursellini : p. 277. Bartoli : Asia. p. 116. 但 Charlevoix : I. p. 42. と川口の學校の様にあるのは誤りである
- (13) Brou : II. p. 35.
- (14) 「京畿篇上」序説一六頁
- (15) Charlevoix : I. pp. 42—43. の記す如く受洗後直ちにはなす
- (16) Thibaut : II. pp. 83—84. Coleridge : II. p. 151.
- (17) Frois : s. 3—4.
- (18) Camara : p. 80. 「京畿篇上」序説一〇頁
- (19) Coleridge : II. pp. 176—177. Thibaut : II. p. 90. Bartoli : Asia. p. 116.

(20) Coleridge: II. p. 72. Thibaut: II. p. 57.

(21) Schilling, D. o. F. M.: Das Schulwesen der Jesuiten in Japan (1551—1614) Münster 1931. s. 68.

(22) Thibaut: II. p. 77. Coleridge: II. pp. 154—155. P. Torres の一五五一年九月二十九日山口發書簡にも同様に出てる。
Schurhammer: Disputationen s. 43. 91.

(23) 山本氏「聖フランシスコ・ザビリエー八九頁。Tursellini: p. 291. にはサヴィエル自らが、ヤジロウ等が葡萄牙人に蹟くのを恐れた旨あり、Coleridge: II. p. 165. はそれをヤジロウの話としてゐる

五、ヤジロウに依る日本事情報告

ヤジロウは聖パウロ學院に學ぶ中、サヴィエルやランチロッティ其他パードレ等に日本事情を物語るのを常とした事は彼等の書簡に散見する。特に一五四九十八年の始、

此の國は如何に福音の種子を受けるに適し且備へられた所であるかは、此書簡に添へて貴下に送るパウロの記事に依り諒解せらるゝであらう。⁽¹⁾ 一五四九・一・一二、サヴェル・ユチン發ロヨラ宛

と云ひ、二日後にも「貴下にパウロが予に與へた日本とその民俗についての記事を送らう」⁽²⁾ 一五四九・一・一四、サヴェル・ユチン發ロヨラ宛と、直接ヤジロウが書き與へた如く記してゐるが、ランチロッティが十二日附矢張りヤジロウ

に依る日本事情を歐洲に送つてゐる。⁽³⁾ 我々はその原文を利用し得ぬが、恐らくサヴィエルの命によりランチロッティがヤジロウより聴取、記録した同一のものであらう。而してサヴィエル初め宣教師等は前

記の如く彼の人物と知識慾と信仰とを稱讚してゐるが、猶サヴィエルにとつては彼の日本事情殊に宗教事情についての知識は當初より不満足であつた。

予が日本に到着したら彼等の書物（經典）の内容等について貴下に報じよう。何となれば無學のパウロからは之について得る所なく、且亦我等の間で拉典で書かれた書の如く、異なる文體で書かれた日本文獻については何等知り得なかつたからである⁽³⁾一五四九・一五四九。

と云ひ、シマン・ロドリゲスにも同様に報じてゐる⁽⁴⁾一五四九・一五四九。即ちヤジロウは漢學、佛學の素養無

く、「たゞ西方より傳はつた事を知るのみ」であつた⁽⁵⁾。此の點からも前身、武士とか僧侶とかの事は否定せらるべきで、寺に保身の爲ほんの暫時隠れたに止まつたであらう。

實際此報告は日本の地理風俗、政治、宗教等あらゆる方面に互つてゐるが、甚だしい誤謬に充ちてゐる。シュールハンマーはヤジロウの日本宗教知識の貧困と誤謬多きを論じ、就中、神觀念に於て甚だしく、サヴィエルに基督教の神を「大日」と呼ぶ如く教へたる如き大失敗を犯してゐる事を論せられた⁽⁶⁾。實に彼は日本南隅の一介の商人に過ぎず、且之を聽くパードレ等の方も未だ日本を見ず發見後僅か數年の葡萄牙商人よりの傳聞による知識程度であるから、筆録に當つて誤解と無理解を多く含めた事であらう。が不満足であつたにしてもランチョロッテイの序にある如く

たとへ彼（ヤジロウ）は又彼の國の宗教については高い教育を受けてゐずとも……その中には多くの知る

價値ある事を含んでゐるから予はその報告を送らう⁷⁾

事實之のみが最も信頼すべき日本知識であつたに相違ない。而して之は亦マルコ・ポロ以來の間接的知識でなく、日本人に依る直接的知識に本づいた最初の纏つた文獻である意義を認めねばならぬ。此の日本事情は既にコーリツヂやハアス⁸⁾に紹介せられ古く淺井氏近く比屋根氏により譯出せられてゐるか⁹⁾、此處には敢て省略する。

右ロヨラ宛の他にサヴィエルは葡萄牙の友人ロドリゲス宛にも同様のものを送つた様である。

貴君は我々が貴君に送つた日本事情に依り充分良く諒解せらるゝであらう。之は非常に優れた徳行

と完全な信實の人、日本人パウロ・デ・サンタ・フェより得たものである⁴⁾一五四九・一・二〇、コチン發

尙フロイスに「次のパラグラフはパウロ・デ・サンタ・フェの報告である¹⁰⁾」とあるが、其處は失はれて何等記されてゐない。原寫本が脱落したものであらうか。何れ此の日本報告の一節であらうと思はれる。尙又パードレ・ニコラオ(ランチロッティ)は既に一五四八年ヤジロウよりの傳聞に本づいた日本事情を若干彼の書簡に記してゐる。その中

日本の商人は支那人と交易す。日本より支那へ銀、武器、硫黃、扇子を輸出し、支那よりは硝石、大量の生糸、陶磁器、水銀、塊狀麝香を積み來る

との一節を岡本氏が引いてゐる¹¹⁾。之に關する限りは宗教事情に見る誤謬もなく、正しく日支貿易品を傳

へて居り、矢張りヤジロウは貿易商であつたと思はしめられる。

更にヤジロウを渡印せしめたカピタン・ジョルジ・アルワールレスもサヴィエルの命により一五四八年の始、亦日本事情を書いてゐるが⁽¹²⁾、ヤジロウに負ふ所も尠くなかつたであらう。

- 註(1) Thibaut: II. pp. 56—57. Coleridge: II. pp. 71—72.
(2) Coleridge: II. p. 79.
(3) Schurhammer: Sprachproblem. s. 20, 24.
(4) Coleridge: II. p. 86. Frois: s. 2.
(5) Coleridge: II. p. 76.
(6) Schurhammer: Sprachproblem. s. 21—26.
(7) Ibid: s. 20.
(8) Coleridge: II. pp. 208—222. Haas: I. s. 280—300.
(9) 淺井氏「書翰記」中卷六三二—五三頁、比屋根氏「サギエル傳」一八一—一九〇頁
(10) Frois: s. 4.
(11) 岡本氏「日歐交通史の研究」六六一頁
(12) Camara: pp. 113—115. Haas: I. s. 269—279. Coleridge: II. pp. 216—222. 但 Schurhammer: Die Zeitgenössischen Quellen zur Geschichte Portugiesisch-Asiens und seiner Nachbarländer (1535—1552). Leipzig. 1932.

六、著 譯 編 書

ヤジロウ自ら編著する程の學識があつたとは思はれぬが、彼は日本人最初のキリシタンとしてサヴィエルを扶け數種の著作をなした。尤も現今に一つも殘存せぬけれども、サヴィエルの日本開教に如何程役立つたかは今更云ふ迄もあるまい。

(一) 「信經ケレドの條々」 一五四七年十二月、初めてマラッカでサヴィエルに會つた時、既に「彼はカテキスモの講解に出席してゐた。亦非常に正確にケレドの條々を一書に書留めてゐた」一五四八・一・二〇、サヴィエル・コチン發ゼズ會本部宛即ちサヴィエルの來る迄の數日間に早くも「信經の條々」とでも題すべき教理問答の拔書を作つてゐた。此のカテキスモは同年サヴィエルが規定したものであつたので、彼の喜びは亦格別であつたに違ひない。右の句に引續いて感激的にヤジロウの信仰と知識慾とを賞讃してゐる。

(二) 「小ドチリナ」 彼の師ランロットイの「彼は我等の信仰の要點を短い綱要に編し、自國語に翻譯した」③との記事に依り、恐らく彼は受洗前後「小ドチリナ・キリシタン」とでも呼ぶべき一書を日本語で書留めてゐた事は確かである。

(三) 「聖マテオ福音の拔書」 更にトルレスの指導の下に一五四八年秋聖マテオ福音の講解を聽き、僅か二回で悉く暗誦した事は既記したが、自ら

聖マテウスの如き高尚なる教を受入れ、之を記憶に止むる才能記憶力及び意志を授け給へるデウスの聖寵を忘るゝことなからしめ給はんことを祈る。右福音書の要點は我が日本の文字にて認め、記憶の便を計りたり。右文字を貴師の閲覽に供す(4)一五四八・一一・二九
ゴア發ロヨラ宛書簡

とロヨラに報じた如く、邦文で筆録し自らの備忘とした。勿論聖書邦譯の嚆矢である。が之をサヴィエルが日本傳道に用ひん爲翻譯せしめたとするは當らぬであらう。

(四) 「日本の事情」 前節に記した一五四九年一月の報告。

(五) 「ドチリナ・キリシタン」 一五四九年八月サヴィエル一行は鹿兒島に來朝、日本傳道が始められた。ヤジロウは恐らく九月中旬、薩摩領主島津貴久を訪れたが、その後、領主母堂の求めに應じ「數日を割いて我等の信仰の多くの事を日本語で書いた」(5)一五四九・一一・五、サ
「ヴェイエル鹿兒島發書簡」多分(二)の「小ドチリナ」を訂補したものであつたらう。グスマン、クラッセ等は「パテルノステル」主禱 アベ・マリア等日本語の二三の祈禱書」としてあるが、常識上夫等を含むにしても、事實はかく明瞭に内容は知られない。

(六) 「十の誠律」マデメントス 之と前後して「我等は學修に費す事四十日で十誠の註解を作つた」(6)一五四九・一一・五、サ
「ヴェイエル鹿兒島發書簡」之はサヴィエルが同一書簡に明確に別記してゐるから(五)とは全く異なるものであるが、それがクラッセの記す如く「信經」クレドを含み、或はシユールハンマーが記す如くサヴィエルが來朝前に完成してゐた「主要な祈禱」と教義の要點即十誠とを含んだ小教理問答書であつたかどうか、私は斷じ得ない。寧ろ次の

「大ドチリナ」の部分譯で、先づ十誡を始とし夫等が次々に譯出されたものであらう。兎に角ヤジロウの協力に依つた事だけは確實である。

(七) 「大ドチリナ・キリシタン」傳道が進むにつれ佛教との對立も明確になつて來た。サヴィエルは我等が福音を宣べ初め、彼等(佛僧)の教ふる虚偽を攻撃する時は、忽ち大なる敵意を以て我々を攻撃する時である⁽¹⁰⁾一五四九・五。

と云つてゐるが、歐洲に於ける新教や印度に於ける印度教、回教や原始宗教に對する必要以上に、佛教なる強宗敵に對する爲、教義書が要望されたであらう。

此冬は日本語で信仰箇條の良い註譯を作り、印刷に従事しよう……我等の最も愛する兄弟パウロは彼等の靈魂(アニマ)の救に必要な事を凡て自國語に忠實に翻譯するであらう⁽¹¹⁾同上書簡

と記し「稿本日本教會史」にも「フランシスコが葡萄牙語で書き、パウロ・デ・サンタ・フェが日本語に翻譯したプラチカ (12) Platica」とある如く之は瞭らかにヤジロウの協力に俟つたのであるが、フロイスはイルマン・ヘルナンデス Juan Fernandes, S. J. も參加した旨を記してゐる。⁽¹³⁾フロイス日本史の各所を綜合して見ても之は相當尤大な著作で、天地創造より基督の出現及苦難、最後の審判に亙り、⁽¹⁴⁾且特に佛教排斥を含んでゐる事は注目さるべきであらう。サヴィエルがモルッカに於て使徒信經を中心として編した所謂モルッカ・カテキスモを根幹としたに相違なく、⁽¹⁵⁾一五四九年の冬、翌年にかけて鹿兒島で改編増

補された。佛教破斥は勿論新補の部である。此の佛教知識も亦ヤジロウに依つたであらうから、前記の如き彼の無知識により不幸にして日本識者の嘲笑を招かざるを得なかつた。⁽¹⁶⁾ フリニアーノは恐らく此の教義書を前にして

パードレ・メストレ・フランシスコは……パウロの援けに依りドチリナ・キリシタンを日本語に譯出しようとして苦心した。然しパウロは教育なき人であつたから、彼の努力にも不拘、全く失敗で、日本人の悪罵と嘲笑の原因になつた⁽¹⁷⁾と記してゐる。

然し本書はガゴ、ヌニエス、カブラル或はフリニアーノの改編又は新編の教義書の根幹となり、更に天草本ドチリナにも一脈の連關を有する事を思へば、⁽¹⁸⁾拙しとは云へ尊重すべきである。且

我等は此の書を苦心して日本語に譯出したが、文字は我等の文字を用ひた⁽¹⁹⁾一五五二・一二・九、
サヴィエル・コチン發

とある如くロマ字で書かれた事も注目すべきで、ヤジロウが最初のロマ字編成に參劃した事は想像に難くない。従つて彼に我國ロマ字の創始者の一人たる榮譽を與へるべきであらう。

尙「稿本日本教會史」はサヴィエルが一五五〇^{天文十九年}五月市來の信徒に「日本文字で記した書を書寫させた」、⁽²⁰⁾「それは彼(サヴィエル)が我等の御主、ゼス・キリシトの御生涯と御苦難とについて編んだもの、七つの告解の詩篇と其他の祈りと教會曆」とであつた。が、之は新編と云ふより大教義書よりの抄本であ

つたであらう。

(八) 書簡 以上の諸編書は現傳せぬが我々はヤジロウの二書簡を見る事が出来る。即一は前來屢々引いた一五四八年十一月二十九日附ゴア發ロヨラ宛の入信經歷を報せるもの、一は一五四九年十一月五日附鹿兒島發ゴア聖パウロ學院宛のもので、共に基督教的信仰に溢れてゐるが、それだけに彼の個性や特徴を知る史的價值がない事を遺憾とせざるを得ない。⁽²¹⁾

- 註(1) Thibaut: II. p. 16. Coleridge: I. p. 417.
(2) Schurhammer: Sprachproblem. s. 22.
(3) Ibid. s. 16.
(4) Camara: p. 80. 「東洋雜考」序説九—一〇頁
(5) Avisi Particolari. p. 296. Thibaut: III. p. 33. Coleridge: II. p. 251.
(6) Guzman: I. p. 419. Crasset: I. pp. 73—74.
(7) Avisi particolari. p. 293. Thibaut: III. p. 19. Coleridge: II. p. 242.
(8) Crasset: I. p. 75.
(9) Schurhammer: Sprachproblem. s. 22.
(10) Thibaut: III. p. 38. Coleridge: II. p. 254. 但し此の箇所は諸書により略されたり、又は一致しない
(11) Avisi Particolari. p. 307. Thibaut: III. pp. 46—47. Coleridge: II. p. 259.
(12) Historia. in. Cros: II. p. 52.
(13) Frois: s. 6.

- (14) 就中 Frois : s. 232.
- (15) Schurhammer : Sprachproblem. s. 22. Haas : I. s. 93—94. Anhang I. s. 243—268. には全文紹介されてゐる
- (16) Fursellini : pp. 306—307. Schurhammer : Xavier. p. 214.
- (17) Schurhammer : Sprachproblem. s. 23.
- (18) 拙稿「ドチリナ・キリシタン雑考」歴史地理七二ノ二〔昭和十三年八月〕五一—六頁参照。其處に指摘した如く日本に於ける
教理問答書の編纂はカトリック教會にても初期の特殊な地位を占むべきものである
- (19) Thibaut : III. p. 80.
- (20) Historia. in Cros : II, pp. 92, 93.
- (21) 兩者共村上博士により邦譯されてゐる。前者は本稿第四節註九參看。後者は「豊後篇上」 Haas : I. s. 301.

七、歸朝と末路

サヴィエル一行はヤジロウを東道者として一五四九年四月ゴアを發し、八月十五日鹿兒島に來朝した。「その地の奉行、^{カピタン}主なる市民等に到る所で非常な厚遇を受け」ヤジロウが島津氏を訪ね、更にサヴィエルを執成し、日本語學習の教師とし或ひは諸書の翻譯に従事し、更にシユールハンマーの用語に従へば「使徒的熱心」を以て⁽¹⁾基督教信仰を宣揚、家族、親戚、友人等を改宗させた事はサヴィエルの數書簡に見える所。「坊主の反對が無かつたなら、彼は容易に全市をも改宗せしめる事が出來たであらう」⁽²⁾一五
⁽³⁾五二
 ・一・二九、サヴィエル
 コチン發ゼズ宛書簡 と云ふ勢ひで、ヤジロウ自身も「デウスの御扶けに依り日本人の大部分は我が正教

に歸依すべき事を期待す⁽⁴⁾」一五四九・一一・五、鹿兒島發ゴア學院宛書簡と云つて希望に燃えた鹿兒島傳道狀況は諸書に譲つて省略しよう。應てサヴィエルは當初からの計畫である京都傳道の爲に一五五〇天文十九年九月鹿兒島を後にする事に決し「彼等の同郷人にして非常に立派なキリシタンなるパウロを宗教的訓戒の教育を全うせんために残留させ⁽⁵⁾」一五五一・七、サヴィエル山口發ゴア同勞宛鹿兒島を後にした。

其後、ヤジロウが百數十の新信徒を如何に守り育てたかはフロイスの記す如く「當然人々の知らうと欲する所であらう⁽⁶⁾」ヤジロウは新信徒等がその信仰を「最後まで持續せしめ給はんことをデウスに祈りて日を過し」ゴアの友人等にデウスへの執成しを願ひ、「我等の救の爲にはデウスに仕ふることを始めたるのみにては足らず、最後まで持續せざるべからず⁽⁷⁾」一五四九・一一・五、聖パウロ學院宛と、自ら進んで信仰の持續の爲に祈り努力せんことを表明してゐる程であつたが、凡ての人の期待は全く裏切られた。フロイスは記して云ふ。

そこに我々は神秘的な測り知られぬデウスの攝理に對する大なる驚嘆を喚起せずには居られない。パウロこそは此の未開拓の葡萄園の發見者、パードレ・メストレ・フランシスコに、日本についての知識を與へた最初の人。印度からパードレ等を日本に導いた人。此の國の言語と風習とを教へた人であつた。彼は印度から不退轉の信仰を持ち、又それにつき良き教育を受けて歸朝し、常に凡てに互り良き模範を與へ、大成と圓熟とを期待された。又二三の人の云ふ如く、東より博士等を導いた

星の如くであつたとは云へ、彼等と共にベトレヘムの厩には入らなかつた。何となれば、前述の如く彼は妻子、親戚友人等を回心させてキリシタンになしてから數年の後に、他の道に入込んで了つたからである。併も我々はその時彼が既に信仰を放棄したのか、一時失つてゐたのか、又は尙キリシタンであつたのか、誰も知る者が無いのである。

ピントは「パウロ・デ・サンタ・フェは八百人に教を授け、五ヶ月以上の間辛抱強く教を説いてゐた」とその活躍を傳へたが、直ぐ引續いて「坊主の侮辱に合ふと彼は支那に赴かんとして出奔した」と記し「稿本日本教會史」もピントの語に本づいて僅か五ヶ月後、坊主の追立を喰つて支那に逃れたと云ひ、バルトリ、クラッセによれば六ヶ月後の事であつたと云ふ。即ち一五五一天文二十年一、二月の頃、サヴィエルが京都より平戸に歸り、山口傳道を開始した頃の事であつた。

之等、古來よりの教會史家の多くは領主及佛僧の迫害が甚だしく、居たゝまれずに逃亡したと同情的見解を述べ、或ひは殊更に觸れるのを避けた傾きがあるけれども、十二年後、イルマン・アルメイダ Luis de Almeida, s. j. が鹿兒島を訪れた時に、尙若干の信徒が熱心に信仰を保持してゐた事を考へれば、ヤジロウの一身上にのみ特種な事情が起り、信仰の熱心を喪つてしまつたのであらう。フロイスは前引に引續いて曰く

パウロは貧困に追立てられてか、彼の國人が其處から齎らす(八幡により)ぼろい結果と財寶とに眩

惑されてか、此の海賊船にのつて支那に渡り、遂にそこで殺されたと云ふ。恐らく彼は臨終にはその罪を懺悔し、良き死を遂げたであらう。然しそれも尙確かな事ではなく、之以外に我々は彼の最後について何も知らない⁽⁶⁾

「稿本日本教會史」は「一種の殉教」と云ひ、バルトリは「デウスは彼の徳に對する報賞を與へた⁽⁹⁾」と記してゐるが、我々は當時の史料としてはピントの「彼は寧波の國 Reyno de Liampoo」で盜賊等に殺された⁽⁸⁾と云ふ記録しか有しないのである。恐らく之が真相であらう。然しサヴィエルは之を最後迄知らなかつた。マラッカより支那に赴く途、日本人ジョアンに宛て、日本に歸つたら鹿兒島のパウロに宜敷傳へる様、依頼した⁽¹³⁾シンガポール發書簡が、それは全く無益に終つたのであつた。(昭和十五年八月)

註(1) Schurhammer : Xavier. p. 210.

(2) Avisi Particolari. pp. 294—295. Thibaut : III. pp. 32—33. Coleridge : II. pp. 250—251, 278.

(3) Thibaut : III. p. 79. Coleridge : II. p. 335.

(4) 「豊後篇上」二九頁 Haas I. s. 301.

(5) Coleridge : II. p. 296.

(6) Frois : s. 18.

(7) 「豊後篇上」二八一—二九頁 Haas : I. s. 301.

(8) Pinto : f. 272.

- (9) Historia. in Cros: II. p. 95.
- (10) Bartoli: Asia. p. 147.
- (11) Crasset: I. p. 82.
- (12) Frois: s. 122. 「聯珠圖」四〇〇頁
- (13) Thibaut: IV. p. 76. Coleridge: II. p. 534.